

# 2025年度 入学試験問題

2月1日 第1回 午前

## 国語（45分）

### 注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から14ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 机の上にあるQRコードのシール（どれでも良い）を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
7. 句読点・記号も字数に数えます。
8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一 — 1〜10のカタカナの部分に漢字に直しなさい。  
また、— 11〜15の読み方をひらがなで書きなさい。  
つづけ字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

1 果てしなくトウロンが続く。

2 貴重品をアズかる。

3 持ち物をイチラン表にする。

4 敵の計略をカンパする。

5 オンコウな人物。

6 ムシヤ震いをする。

7 年長者をウヤマウ。

8 日本に帰る途中、船がハワイにキコウする。

9 ゲンミツな基準で判断する。

10 ヒンプの差が激しい。

11 この車は燃費がいい。

12 木かげに集う子どもたち。

13 救済方法を考える。

14 定石通りの勝ち方。

15 ビル建設の聴聞会を開く。

二次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校三年生の「私」（高村タ）のクラスは、合唱コンクールの自由曲に合唱アレンジされていらない曲を選んだ。伴奏の「私」がアレンジすることになり、音楽の祐一先生に相談することにした。

それから私は祐一先生が大丈夫な日は、放課後に音楽準備室

に通って、二人で「夢のうた」のアレンジを進めていった。美貴と星野くんも最初は来てくれたけど、作業を始めると結局暇にさせるだけなので、先生と二人で進めるようになった。

すっかり曲を聴き込んでくれた先生は、音楽的なアイデアをいくつも出してくれた。

「Bメロの掛け合いのところんだけど、高村さんのものに加え、テナーもユニゾンじゃなくて、こんな風に裏拍で入ると面白いんじゃないかな。中学生の合唱と違って、ある程度の難度があった方がコンクールで評価されやすい。というか審査員の立場で言うと評価しやすい」

彼はピアノを弾いてから、譜面台においた五線譜に鉛筆で音符を書き込んでいく。そうした作業を、すごく楽しんでるように見える。

「そんなことまで言ってくれていいんですか」

「ごめん、今のは失言。ただ、より合唱として面白くするために言ってる。それから和音の積み方についても、こんな工夫があってもいいと思った」

そう言って、先生はピアノで和音を弾く。うん、絶対そっちの方がいい。彼が話す言葉や音符を書く手つきを見ると、ちゃんと音楽の先生なんだな、と失礼ながら感心した。

そんな風にして、基本的には私のアイデアが元になっているけれど、「夢のうた」はより合唱として完成度の高いアレンジに練りあがっていった。

【A】時間がかるかと思っただけど、二週間もすれば合唱のアレンジは形になった。合唱バージョンは原曲より、切なさど壮大さが増して感じられる。

「うん、これで歌ってみよう。楽譜は人数分パソコンで印刷しておくよ。見やすい方がいいだろうからね。細かいところは合

わせたのを聴いてみて、手書きで調整していこう。授業で合わせる時があるだろうから、その時に僕からもアドバイスする」

「ありがとうございます、と私は言った。」

「ピアノ伴奏の楽譜は自分で書けるかな？ 前奏はオリジナル曲のままでもいいよね。原曲のピアノも歌いながら弾くことが前提になっているフレーズだから、これはそのまま参考にしていいと思う。歌の間を、ちよつとしたメロディで埋めるとか、そんな感じかな。大丈夫だよな？」

「大丈夫だと思います。五線紙だけもらって行っていいですか？」

「もちろん、と祐一先生は言って、後ろの棚を探し始めた。」

「そうだ、パート練習はどうやって進めていく予定かな？」

「メトロノームに合わせてピアノでメロディを弾いて、それをスマホで録音しようと思います。データはLINEとかで共有すればいいので」

「なるほど、<sup>3</sup> 便利な時代だね」

最近彼は私の前で「便利な時代だね」と何度も言う。

「今回のアレンジも、僕の時代ではできなかっただろうな。」

「**B**」挑戦したとしてもすぐに行き詰まったと思う。

「**C**」高村さんの知識や能力があったからできたことだけど、和音のことも調べたら出てきたって言ってたよね？」

「はい」

「助かるよね。今の時代は知りたいことを、**D**」知るこ  
とができる」

「そう思います。でも、いいことばかりじゃないです」

「そう？」と言いながら彼はこちらに振り返った。

「<sup>4</sup> なんでも裏側が見えてしまうんです。良くも悪くも」

「良くも悪くも」

「はい。知らなくていいことも、ありますから」

そういうものか、と彼は納得したように言うのと、手に持った五線紙の束を差し出した。

「高村さん、進路はどうするんだっけ？」

「<sup>5</sup> 彼はさつきよりも先生の顔つきになって尋ねた。」

「大学に行きますよ」

私は受け取った五線紙を、カバンにしまいながら言った。

「勉強は順調？」

「模試の判定を見る限り、問題なさそうでした」

「頼もしいね」

「でも、なんの意味があるのかわかりません」

私はなんでこんなことを祐一先生に言ってるんだろうと思っ  
た。隣の音楽室から、吹奏楽部のフルートの音がした。

「大学に行く意味がないって思うってこと？」

「いえ、意味はあると思ってます。データによると、大卒とそ  
うじゃない場合で、生涯年収は驚くほど違うらしいので」

今の高校生は、大人が思っている以上に色んなことを知って  
いる。

「**a** 的だね」

「はい。でもそれもこれまでの時代の話であって、これからはホ  
ワイトカラー（＝事務労働者。サラリーマン）の仕事は無くなっ  
ていく一方らしいです。だから私みたいに普通の大学に行っても、  
なんの意味もないと言っている著名人もたくさんいます」

先生は少し困ったような顔をした。そう、そんなことを言わ  
れても、大人は困る。大人だって、未来のことはよくわかって  
いないのだ。ネットの中にいる大人はみんな危機を煽るのに、  
現実の世界にいる大人はみんな、常に私よりも **b** 的なこと  
ばかり言う。私が不安になりすぎなのだろうか。

「色々調べてるんだね。たくさん情報があるから迷うのはわかるよ。でも、そういうことを抜きにして、好きなことが学べる大学は楽しいと思うよ」

「私、好きなことがないんです。何かに熱意が湧いてこないというか」

「熱意がない人が、こんな風に合唱のアレンジはできないと思うけどな」

祐一先生は楽譜に視線を送って言った。私は首を横に振る。

「違うんです。実はこれ、ただ頼まれたからやってるだけなんです。それにこの曲じやないと、このクラスは上手くないことがわかったから。ピアノ伴奏者として、面倒ごとを避けただけです」

私は自分で言いながら、<sup>6</sup> 冷凍庫の奥深くに入れられたみたいに、心が急速に冷えていくのがわかった。面倒な生徒だな、と思われたかもしれない。

「<sup>7</sup> 高村さんは優しいんだね」

なのに祐一先生の声は、むしろ少し嬉しそうだっただけ。

「高村さんは優しいから、周りのためにそういう行動ができるんだよ」

先生の顔つきをしたまま、祐一先生はそう言った。

(中略)

九月からパート練習をスタートした。順調に仕上がっていく中、「私」は自転車で転倒し、左手中指の骨にヒビが入ってしまった。病院からの帰り、父が早期退職することになったと母から告げられ、経済的に不安定になるのではないかと心配になる。

「本当にごめんなさい」

私はみんなの前で頭を下げた。ピアノが弾けない。指の骨に

ヒビが入って、コンクール当日には間に合わないことをみんなに伝えた時、世界の空気が凍ってしまったような気がした。

みんなに責められても仕方ないと思う。

だけどもみんなの反応は、私が思っていたものとは全く違った。

「いや、気にせんでええよ」

星野くんが最初にそう言うてくれて、凍った空気は一瞬にして溶けた。

クラスの他のみんなも「気にしなくていいよ」「それで済んでよかった」と優しい言葉を口々に言うてくれた。

「夕、心配せんでええよ。私が代わりに、ピアノ弾くから」

そう言ったのは美貴だった。力強い声だった。

「今まで色んなものを夕に任せ過ぎてたんや。私もピアノ習ってたから。夕ほど上手くはないけど、練習すれば」<sup>1</sup> そつなく、という程度には弾けると思う。そんなに難しい伴奏じやないやんね？」

美貴はなぜか、ちよつとだけ泣きそうな顔になって私に尋ねた。

「うん、そんな複雑じやないと思う。いわゆる伴奏って感じだから」

「じゃあ、夕に指導してもらいながら、私がやってみせる」

美貴は<sup>8</sup> 自分に言い聞かせるように言った。

「ごめん」

「夕は謝らなくていい。怪我をして、大変なのは夕だから。怪我しても歌は歌える？」

「歌える」

「じゃあ私の代わりに、アルトのパートに入ってもらってもいい？」

「うん」

「逆に、高村さんにパートの練習の指導をしてもらえるのは、良いことかもしれない。」<sup>9</sup> 災い転じて福となそう

そんなポジティブなことを藤巻くんが言ってくれて、この場はⅡ丸く収まった。大事な時に怪我なんかして、と責められるかと思つたのに。みんなの優しさが胸に沁みだ。

自分が考えた音のラインなので、メロディは完全に覚えていた。アルトのパートに入つて一度一緒に歌わせてもらう。みんなとタイミングを合わせて、声と言葉でメロディをなぞる。歌は好きだけど、昔からずっと伴奏を任されてきたから、クラスで合唱で歌う機会はほとんどなかった。慣れないこともあって、少し控えめに歌う。

何日か練習して、その週の音楽の授業の時間に、美貴の伴奏で全員で合わせた。

美貴のピアノはまだ、一つ一つの音のバランスが取れていなかった。リズムも悪くて、音に歯切れがない。私もまだ歌うことに慣れなくて、美貴がアルトからいなくなった分のパワーを埋められていなかった。歌いながら、自分が弾くはずだったピアノにはばかり耳がいつてしまう。

藤巻くんの指揮に合わせて、なんとか合唱は繋がっていくけれど、これまでより明らかに精度は下がっていた。でも、みんなそんなことは言わない。祐一先生もそうだ。何か言うと、Ⅲ暗に私を責めることになるから。

<sup>10</sup> みんなの優しさが、違う意味で胸に沁みて苦しくなっていた。

せっかくクラスはまとまっていたのに。みんなで楽しい高校最後の思い出を作ったかっただのに。ピアノを弾けなくなった私が、それを崩してしまったんだ。そう思うと涙が込み上げてき

て、私は慌てて俯いた。

次の週、音楽の授業で合唱の練習が終わったあと、私は祐一先生に呼び止められた。「少し話そう」と言われて、もう馴染みのある音楽準備室に入った。私はピアノの前の椅子に座って、先生は少し離れた窓際にある椅子に座った。彼の手には「夢のうた」の楽譜があつた。

「怪我はどう？ まだ痛む？」

私の左手を見ながら言った。

「痛みはもうおさまりました。でも、まだしばらく固定しておく必要があるみたいですよ」

左手の中指は、まだ太い筒をつけているみたいに包帯で巻かれています。

「悔しいと思うけど、あまり自分を責めないようにね。合唱のレベルも、先週より良くなってるから」

「すみません」

また気を遣ってもらってるな、と思った。

「本当だよ、高村さんは中で一緒に歌うようになったことで、成長がわかりにくいと思うけど、先週より上手くなってる。ピアノだってそうだ。ずいぶん練習してるみたいだね」

「美貴には迷惑かけちゃいました」

「何を言ってるんだよ。そもそも、高村さんが頑張らないとこの合唱は成り立ってなかったわけだからね。助け合いだと思うと、僕は青春の美しい一面を見ているような気持ちになったよ。怪我の痛みは辛いだろうけど」

私を励ますように祐一先生は言った。

「多分、神様がピアノに逃げるなって、私に言ってるんだと思います」

「逃げるって？」

「不安なことを、ピアノで誤魔化ごまかしていた気がしています。弾いている間は、不安なことも何もかも忘れられたから」

「……ふむ。何かあったのかい？」

そう言われても、お父さんのことは祐一先生どころか、人に言えることじゃない。そして家族のことだけじゃなくて、私はずっと感じていた未来への希望のなさも、うまく人に伝えられる自信がない。大学の必要性、女性の平均年収、社会保障費の増大。調べれば調べるほど、私の未来が今よりよくなっていくことはない。そんな気持ちになる。大人になっていくのが怖こわい。ずっと高校生でいられたらいいのに。部活で必死にバスケをしたり、目の前のテストのために勉強したり、行事に力を注いだり、そんな時間をこれからも過ごせたらいいのに。ここから先は現実が待っている。現実。つまり、つまらないことが約束された未来だ。

私、高校生活が楽しかったんだ。今になってやっと気づいた。

「何があったとか、簡単に言えないよね。ごめん」

黙だまっている私に祐一先生は言った。

「よかつたら少しだけ、この曲の話をしてもいいかな。授業では話せないことなんだけど」

彼は手に持った「夢のうた」の楽譜に一度視線を落とした。

私は小さく頷うなずく。

「僕は、染谷達也たつやの熱心なファンだったんだよ」

祐一先生は少し照れたように言った。

「彼がデビューした時、僕は高校生だった。彼の曲を聴いて、人生で初めてファンレターを書いたんだよ。何を書いたのか細かいところまでは覚えてないけど、”あなたの作る音楽はすごくいい音楽で、”<sup>11</sup>聴いたことのない音の響びびきに僕は感動しまし

た。これからもずっと応援おうえんしてます。”という主旨しゅしのことを書いたんだ。恥ずかしい話だね。今の子はきつとファンレターなんて書かないだろう。多分SNSでメッセージを送る。良くも悪くも、簡単に手が届く時代になつてから」

「ファンレター、いいじゃないですか。恥ずかしいことじゃないです」

「そうかな。でも本当に恥ずかしいのは、僕はこんな手紙まで書いたくせに、ライブに一回行ったきりで、そのあと彼の活動を応援することはなかったんだ」

祐一先生は言いながら、窓の外に視線を送った。

「染谷達也の音楽がすごく好きだったのは本当だった。ずっとクラシックピアノを勉強してきた僕には、彼のピアノが出す音は衝撃しょうげきだったんだ。心を一瞬で変えてくれる、まるで魔法まほうのような音楽だと思った。あとにも先にも、ファンレターを書いたのは彼だけだったよ。だけど、その頃の僕は色んなことが忙いそがかったし、なぜか彼が永遠に音楽活動を続けていくような、そんな思い込みをしていた。彼が活動をやめると聞いた時、すごく後悔こうかいしたんだ」

「最後のライブとか、行ったんですか？」

「彼の最後のライブは東京のライブハウスで行われたんだけどね、僕は行かなかった」

「どうしてですか？」

「うーん、卑怯ひきょうな気がしたんだよ。読まれているかもわからなけれど、あんなファンレターまで送って、そのあとすっかり忘れて、都合よく最後だけライブに行きましたみたいなのが、自分にとつて許せなかった」

「そんなの誰も気にしないと思うけど。」<sup>12</sup>祐一先生、結構変な人だなと思った。変で、まっすぐな人だ。

「せめて、と思って最後のシングル曲は買った。それがこの『夢のうた』だった。今から八年前のことだよ」

知らなかった。彼がもう活動をしていないことは知っていたけれど、この曲がいつの曲なのかまでは調べなかった。

「どうして彼は音楽をやめたんですか？」

「どうしてだろうね。人気がなかったからかもしれないし、そんなことは何も関係がないのかもしれない。でもきつと簡単には語れない、何かがあったんだろうね。少なくともファンの人に話したい理由ではなかったのだと思う」

「先生は、当時の懐かしさからこの曲を手伝ってくれたんですか？」

「それもある。あと、高村さんが作ってきた和音に感銘を受けたことも理由の一つだ。だけど、一番大きな理由はね」

祐一先生は一度言葉を切つて、小さく微笑んでから続けた。

「これは、僕にとつての罪滅ぼしみたいなものなんだよ。ファンの一人としてのね。僕は彼が活動している時に、ちゃんと応援できなかった。僕がもっとライブに行ったりCDを買ったりしていたら、何か未来は変わっていたかもしれない」

祐一先生は、染谷達也の音楽が本当に好きだったんだなと思つた。すごく誠実な、好きだ。

「ああごめん、個人的な話をペラペラと。ともかくこの歌は彼のキャリアの最後の曲で、別れの歌でもある。だから星野くんは背景を知らなくても、この歌詞が高校最後の今歌うのにピッタリだと思つたんだろうね」

私は楽譜に視線を落とす。

「そう思つて、歌詞を読んでごらんよ。彼はどんな気持ちで音楽をやめたんだろうか。どんな気持ちで最後にこの曲を書いたんだろうか。考えながら聴いてみるといい。君たちは染谷達也

とは随分歳が離れているはずだけど、世代を超えて重なる想いがあると思う」

14 私の目に映る楽譜に印刷された言葉が、これまでと違う色を放っているように見えた。

祐一先生が言ったことは、確かに審査員を務める彼の立場でみんなに言えることではないと思つた。だから、代わりに私がその役割を担える気がした。

15 本番はもう来週だ。私は染谷達也の経歴を調べて、そこから「夢のうた」の歌詞について考察した。

十年の活動。ネットで見られる過去のインタビュー記事を見る限り、彼は自分の作品に妥協を許さない人だったと思う。こだわりの音楽をみんなに聴いてもらいたいと思つていたんじゃないだろうか。

過去のライブの規模を調べると、後半にいくに連れて縮小していることがわかつた。人気を維持するのが難しかったのだろう。私は音楽の世界のことはよくわからないけれど、きつと景気にも左右される業界なのだと思う。そんな中で、大きなヒット曲がないまま十年続けるといふのは、なかなか大変なことだったのでないだろうか。

そして、最後に作つた「夢のうた」。

私は今まで、歌詞に注目して音楽を聴いてこなかった。音楽に大事なものはメロディだと思つていたからだ。だけど注意して歌詞を聴いてみると、新しい意味を音楽に与えてくれる。

実際にどんな思いで彼がこの歌詞を書いたのかはわからないけれど、自分なりに解釈していくと興味深いことがわかつた。

この歌詞で彼は、誰かに対する感謝を歌つていたように思う。そして、音楽というものが持つて持っている力を、最後まで信じ続け

ていたのだ。十年間音楽の良さを追い求めてきて、最後に辿り着いたメッセーじがこれだったのだと思うと、胸の奥底が熱く泡立つ。

そうやって調べた彼の経歴や性格、そして自分の解釈をノートに書ききりまとめて、それをクラスの人數分コピーした。染谷達也から音楽への情熱を分けてもらったみたいなのに、私は行動した。

「ちよつと、みんないいかな」

昼休みが始まる時に、コピーしてきたプリントを持って、教室の前に立った。普段こんな風にみんなの前に立つタイプじゃないので、大きな声を出した私を見て、みんな驚いた顔をしている。

「今回の合唱曲について、みんなに知っておいてほしいことがあるから、まとめてきました」

私がみんなにプリントを配り始めると、昼休みなのに教室は静かになった。

「合唱曲『夢のうた』はシンガーソングライター染谷達也が、活動をやめる前に最後に書いた歌でした。そこで私なりに、彼がどんな気持ちでこの歌を書いたのか考えてきました」

みんな、私の話を聞きながらプリントを読んでくれる。じっくり読んでから、星野くんが言った。

「なるほどなあ。こうやって読むと、これめっちゃいい歌詞やな」

「そうやんね。私はこの歌は、大切な人への感謝を歌った歌やと思います。だから私は、高校最後に同じクラスになったみんなへの、大きな感謝をのせて歌おうと思ってます」

言いながら、私は今すぐく恥ずかしいことを言ってるんじゃないかと思った。一人でやる気を見せて、寒いやつ。でも今、

そんなことを気にして何も言わずにいたら、きっと後悔する。私はこの高校生活が好きだったのだから。

「みんな、私が怪我して迷惑かけてごめん。美貴も、負担をかけてごめん。でも、いつまでもへこんではいられんと思った。私は、今の私にできることを精一杯やる。来週まで、みんな力を合わせて頑張ろう」

誰からともなく、教室に拍手が起こった。すぐ前の席に座っている美貴は涙目になっている。

「みんなで優勝しよ！」

私は大きな声で言った。教室に歓声が上がった。

十一月の最初の金曜日、コンクール本番の日がやってきた。昼休みのあと、三年生の全八クラスが講堂に集まって、順番に合唱を披露していく。

事前に指揮者の藤巻くんが参加したくじ引きで、私たち三組は六番目に歌うことが決まっていた。

やるだけのことはやってきた。ここまで来たら、今からできることはもうない。

美貴は直前まで楽譜と睨めっこして、緊張している様子だった。申し訳なく思うけれど、私はすっかりアルトのパートを、思いを込めて歌おう。

保護者は講堂の後ろの方に用意された席に座っている。私の両親も、どこかに座っているのだと思う。

五番目のクラスが終わって、私たちのクラスは移動する。横の階段からのぼって、壇上に三列に並んで立つ。

まずは課題曲の「サリマライズ」からだ。藤巻くんの指揮で、アカペラの曲が始まる。歌い慣れた歌を、息を合わせて歌う。二分ほどの短い歌は、本番では一瞬で終わってしまう。

課題曲が終わると、美貴がピアノへと移動する。16 その後ろ姿は、とても頼もしいものに見えた。

優勝したい。

17 最初はちよつと他人事ひとごとだったのに、今はそう思う。

優勝したいというより、みんなを優勝させてあげたい、という気持ちの方が大きい気がする。とにかく、落ち着いて歌を歌おう。

美貴の前奏が始まった。美しいピアノのアルペジオ。他のクラス生徒はもちろん、先生たちの中でも祐一先生以外は誰も知らない曲のはずだ。このいい曲をみんなに届けられることが、今はただ嬉しくなっていた。

私たちは全員で、Aメロの同じメロディをユニゾンで歌う。練習通り、抑え目おさめに、そしてそこからコーラスはそれぞれの役割へと分かれていく。

合唱って不思議だ。自分の声はみんなに埋もれてしまうはずなのに、自分の声をもっと大きな存在になれているような感覚になる。一人では表現できない、辿り着けない世界に足を踏み入れられる。

気持ちいい。

ピアノが鳴る。体育館に私たちの声が鳴り響く。私たち一人一人の声は大きな一つの塊かたまりとなり、羽が生えて空中を舞う。まるで魔法みたいだ。

18 魔法なんてないと思っていたのに、ここにあった。

私は歌いながら涙ぐんでいた。こんなのだめだ。音楽的に、絶対減点だ。なのに、溢れ出した感情は止まらない。

高校生活が終わってしまう。私はこれからどうなるんだろう。未来はわからない。不安もある。でも、悪いことばかりじゃない。私の知らない、スマホでは得られない、魔法のような体

験がきつと待っている。なぜかそう、強く信じられた。私は想いを込めて、歌詞を歌う。

「19 夢のうた」

夢の時間だったと気づくのは 夢から覚めてから  
千切れた雲は大空で 遙かな旅路の先へゆく

あなたの大切さに気づくのは もういなくなつてから  
羽ばたく鳥は山の向こう 振り返らずに風に乗る

明日を知った気がしたあとに 今日に残った宝物一つ  
全部終わった気がしたあとに この手に残った未来一つ

夢のうた それはありふれたうた

涙にならない感情も

言葉にできない後悔も

彩ることのできるうた

夢のうた それはあなたへ歌ううた

一緒に過ごした思い出と

言えないままの感謝を

のせるためのうた

どんな未来が来ても

あなたといた今日までの日々は

色褪せない

(河邊徹『ヒカリノオト』ポプラ社より)

問1 — 1 「ごめん、今のは失言」とありますが、先生がどのように言ったのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 本来は「私」が自力で合唱曲のアレンジを完成させるべきなのに、アイディアを提供してしまったから。

イ 「私」とのやりとりが楽しかったので思わず本音をもたらしてしまったが、失礼な発言だったと後悔したから。

ウ 今までの評価方法がこれから変更になるということを、もらしてしまったから。

エ 本来は、審査員の立場で評価に関する話をしてはいけないのに、うっかり話してしまったから。

問2 — 2 「合唱として完成度の高いアレンジに練りあがっていた」とありますが、原曲と比べて何が変化したのですか。本文から七字でぬき出しなさい。

問3 【A】 A～Dに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。(同じ記号は一度しか使えません。)

ア すぐに イ たとえ ウ もっと エ もちろん

問4 — 3 「便利な時代だね」とありますが「便利な時代」の例として**適当でないもの**を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 検索して出てきた和音を曲のアレンジに使用する。
- イ メトロノームに合わせてピアノでメロディを弾く。
- ウ 録音した伴奏をLINEで共有する。
- エ ピアノの伴奏をスマホで録音する。

問5 — 4 「なんでも裏側が見えてしまうんです」とありますが、「私」は大学進学の良い面・悪い面をどのように見ていますか。次の説明から最も適当なものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

【良い面】

ア 大学に行くとな自分の興味の幅が広がる。

イ 大学を卒業すると生涯の年収が高い。

ウ 大学に行くとな好きなことを専門的に学べる。

エ 大学を卒業することで世界と勝負する力がつく。

【悪い面】

ア 大学を卒業しても、自分で会社を作れないと意味はない。

イ 大学に行っても勉強が難しく、卒業できるとは限らない。

ウ 大学を卒業しても、つきたい仕事につけないかもしれない。

エ 大学で一生懸命勉強しても、仕事に生かすことはできない。

問6 — 5 「彼はさつきよりも先生の顔つきになって尋ねた」とありますが、この表現から先生のどのような様子がかかりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の将来について、教師としての立場から真剣に聞き出そうとしている。

イ 音楽の話は気楽にしていたが、「私」の将来の話は真面目に聞こうと切り替えている。

ウ 「私」の音楽の才能に気づき、将来は音楽を専攻することを勧めようとしている。

エ 普段から迷いを抱えている様子の「私」に、進路の決め方を教えようとしている。

問7  a bに入る言葉として最も適当なものをそれぞれ次

から選び、記号で答えなさい。

a ア 現実    イ 悲観    ウ 建設    エ 懷疑かいぎ

b ア 感情    イ 空想    ウ 楽観    エ 絶望

問8 — 6 「冷凍庫の奥深くに入れられたみたいに、心が急速に冷えていくのがわかった」について、次の問いに答えなさい。

① 「冷凍庫の奥深くに入れられたみたいに」に使われている表現技法を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法ちよくゆほう    イ 隠喩法いんゆほう    ウ 擬人法ぎじんほう    エ 体言止め

② これは「私」のどのような心情を表していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の気持ちを正直に先生に伝えたことで、新しい問題を生んでしまったのではないかと心配している。

イ 自分が抱えている悩みなやみを先生にうっかり話してしまったことで、先生にきらわれたに違いないと確信した。

ウ 自分の本音を先生に打ち明けたことで、ずっと見ないふりをしていて自分の心の傷が開いてしまった。

エ 自分が考えているネガティブな思いを先生に話したことで、ますます自分のことがいやになってしまっている。

問9 — 7 「高村さんは優しいんだね」とありますが、先生

は「私」がどのように行動していると感じたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの合唱の失敗で音楽の先生の指導が批判されないよう、何とか形だけは整えようとしている。

イ クラスの合唱を成功させるために、なんとかみんなが仲良くなって団結するよう説得して回っている。

ウ クラスの合唱をどうにかしなければという責任感を持ち、みんなのために自分のできることをしようとしている。

エ クラスの合唱が成功すれば、みんなの学校生活が楽しくなるというかすかな望みにかけて、努力している。

問10 — I、II、IIIの意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

I 「そつなく」

ア 音程だけは正確に    イ 大半の人が納得する

II 「丸く収まった」

ア みんなが喜んだ    イ 穏やかにまとまった

III 「暗に」

ア はつきりとは示さず    イ 裏でこそこそと

ウ 冷ややかな態度で    エ 落ちこんだ気分で

問 11

——8 「自分に言い聞かせるように言った」とありますが、このときの美貴の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これまで練習してきた歌声を披露できなくなってしまい悔しく思いながらも、「私」を思いやつて精一杯我慢している。

イ 頼りにしていた「私」が伴奏できなくなったことを心細く思いながらも、自分がやるしかない気持ちで奮い立たせている。

ウ 合唱の伴奏者が交代になったことに怒りを感じながらも、みんなの気分を高めることが大事だと考えて、明るく振る舞っている。

エ 「私」が事故にあってしまったのは、自分がピアノのプレッシャーを与えすぎてしまったせいだと考え、自分を責めてしまっている。

問 12

——9 「災い転じて福となそう」とありますが、「災い転じて福となす」と同じ意味のことわざ・故事成語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笑う門には福来る                   イ 光陰矢のごとし  
ウ 案ずるより生むがやすし       エ けがの功名

問 13

——10 「みんなの優しさ」とは、どのような優しさですか。四十五字以上五十字以内で答えなさい。

問 14

——11 「聴いたことのない音の響きに僕は感動しました」とありますが、その感動を具体的に説明している一文を、本文から二十五字以上三十字以内でぬき出し、はじめの五字で答えなさい。

問 15

——12 「祐一先生、結構変な人」とありますが、なぜ「変」と言っているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 授業では堅苦しいのに、急に高校時代にファンだったアーティストのことを熱く語り続けているから。

イ 高校時代のことをいまだに照れて話していて、恥ずかしいと言っているから。

ウ 自分以外誰も気にしないことにこだわり、自分の行動に制限をかけ、せっかくの機会をなくしているから。

エ 自分の思い込みで相手の考えを決めていて、ライブに行くのが不当かどうか誰にも確認していないから。

問 16

——13 「罪滅ぼしてみたいなもの」とありますが、先生は何を「罪」だと考えていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が書いたファンレターが読まれたかどうかを気にするあまりに、染谷達也が最後に行ったライブに行かなかったこと。

イ 人氣が落ち目になっていて本当はライブに行くつもりもなかったのに、不誠実にも染谷達也に期待をさせるようなファンレターを書いてしまったこと。

ウ ファンレターまで書いておきながら、その活動を積極的に応援しなかったせいで、染谷達也が音楽活動を短期間で終えることになったかもしれないこと。

エ 実際は人氣のないシンガーソングライターだった染谷達也を、ファンレターで絶賛した自分の見る目のなさがっかりしてしまったこと。

問 17

——14 「私の目に映る楽譜に印刷された言葉が、これま

と違う色を放っているように見えた」とはどういうことですか。四十五字以上五十五字以内で答えなさい。

問 18

——15 『夢のうた』の歌詞について考察した」とありますが、「私」はこの曲がどのような歌だと考えましたか。本文から十三字でぬき出しなさい。

問 19

——16 「その後ろ姿は、とても頼もしいものに見えた」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 得意なピアノの演奏で、合唱の質を引き上げようという強い意気込みを感じたから。

イ 今まで懸命に伴奏練習を積み重ねた努力が、体からにじみ出ているように感じたから。

ウ 練習を重ねることで、「私」より上手く弾けるようになったという自信がうかがえたから。

エ 他のクラスの合唱を聞いて、自分のクラスの優勝を確信している様子がうかがえたから。

問 20

——17 「最初はちよつと他人事だった」とありますが、「私」が合唱に対して「他人事だった」ことがわかるセリフを本文からぬき出し、はじめの五字で答えなさい。はじまりの『』（カギカッコ）の次の文字から書きなさい。

問 21

——18 「魔法なんてないと思っていたのに、ここにあった」とありますが、ここで言う「魔法」とはどういうことですか。次から適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青春時代にしかない、まぶしい経験を積むことで可能になる、新たな世界の発見。

イ みんなと一緒になつて一つのものに突き進むうちに得られる、一人では味わうことのできない感覚。

ウ 何かに夢中になり熱くなつていくことで得られる、空に羽ばたくような気分の高まり。

エ ネットや話を聞くだけでは得られない、現実に体験することので得られる充実感。

問22

——19 「夢のうた」について次の問いに答えなさい。

① この歌詞に使われている表現技法の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 直喩法を用いて幻想的な夢の世界を描き、「あなた」の持つ不思議な美しさや優しさを表現している。

イ 擬人法を用いることで様々な夢の形を表現し、「あなた」と共に夢をみた体験の素晴らしさや楽しさを強調している。

ウ 倒置法や繰り返しなどの技法を多用して特定の言葉を強調し、「あなた」を失った絶望をメッセージにしている。

エ 対句や体言止めの技法を使って詩にリズムを与え、「あなた」への思いを情感を込めて表現している。

②

この作品を読んだ生徒が「夢のうた」について会話をしています。(1)にあてはまる語を本文から四字でぬき出しなさい。また、(2)には後のア～エから最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

A この歌詞にある「夢の時間」って「私」にとっては(1)のことだよね。

B うんうん。「あなた」というのはクラスみんなかな。小説内に出て来ていたよね。

A 「遙かな旅路の先」というのは何を意味しているだろう。

B ( 2 )

A そう考えると「千切れた雲」はばらばらになったみんなのことになるんだね。

B すてきな歌だね。私も歌いたくなっちゃった！

ア つまらないことが約束された未来のことではないかな。

イ みんなで遠くに旅行しに行くことではないかな。

ウ これから時間をかけて歩んでいく将来のことではないかな。

エ 鳥が夕暮れに方々に飛んでいく様子のことではないかな。

問題は以上です。